

【古文】

先の世にも御契りや深かりけむ、世になく清らなる玉の男御子さへ生ま
れたまひぬ。いつしかと心もとながらせたまひて、急ぎ参らせて御覧する
に、めづらかなる稚児の御容貌なり。

一の皇子は、右大臣の女御の御腹にて、寄せ重く、疑ひなき儲の君と、世
にもてかしづきいきこゆれど、①この御にほひには並びたまふべくもあらざ
りければ、おほかたのやむごとなき御思ひにて、この君をば、私物に思ほ
しかしづきたまふこと限りなし。

初めよりおしなべての上宮仕へしうたまふべき際にはあらざりき。おぼえ
いとやむごとなく、上衆めかしけれど、②わりなくまつはさせたまふあまり
に、さるべき御遊びの折々、何事にもゆゑある事のふしじには、まづ参う
上らせたまふ。ある時には、大御籠もり過ぐして、やがてさぶらはせたまひ
など、あながちに御前去らずもてなさせたまひしほどに、おのづから軽き方
にも見えしを、この御子生まれたまひて後は、いと心ことに思ほしおきて
たれば、「坊にも、ようせずは、この御子の居たまふべきなめり」と、③一の
皇子の女御は思し疑へり。人より先に参りたまひて、やむごとなき御思ひ
なべてならず、皇女たちなどもおはしませば、④この御方の御諫をのみぞ、
なほわづらはしう心苦しう思ひきこえさせたまひける。

かしこき御蔭をば頼みきこえながら、落としめ疵を求めたまふ人は多く、
わが身はか弱くものはかなきありさまにて、なかなかなるもの思ひをぞし
きたまふ。御局は桐壺なり。あまたの御方がたを過ぎさせたまひて、ひま

なき御前渡りに、人の御心を尽くしたまふも、げにことわりと見えたり。参
う上りたまふにも、あまりうちしきる折々は、打橋、渡殿のここかしこの道
に、あやしきわざをしつつ、御送り迎への人の衣の裾、堪へがたく、まさな
きこともあり。またある時には、え避らぬ馬道の戸を鎖しこめ、こなたかな
た心を合はせて、はしたなめわづらはせたまふ時も多かり。事にふれて数知
らず⑤苦しきことのみまされば、いといたう思ひわびたるを、いとどあはれ
と御覧じて、後涼殿にもとよりさぶらひたまふ更衣の曹司を他に移させた
まひて、上局に賜はす。⑥その恨みましてやらむ方なし。

【与謝野晶子訳】

どの前生の縁が深かったか、またもないような美しい皇子までがこの人
からお生まれになった。寵姫を母とした御子を早く御覧になりたい思召しか
ら、正規の日数が立つとすぐに更衣母子を宮中へお招きになった。小皇子は
いかなる美なるものよりも美しいお顔をしておいでになった。

帝の第一皇子は右大臣の娘の女御からお生まれになって、重い外戚が背景
になっていて、疑いもない未来の皇太子として世の人は尊敬をささげている
が、第二の皇子の美貌にならぶことがおできにならぬため、それは皇家の長
子として大事にあそばされ、これは御自身の愛子として非常に大事がつてお
いでになった。

更衣は初めから普通の朝廷の女官として奉仕するほどの軽い身分ではな
かった。ただお愛しになるあまりに、その人自身は最高の貴女と言ってよい
ほどのりっぱな女ではあったが、始終おそばへお置きになろうとして、殿上
で音楽その他のお催し事をあそばす際には、だれよりもまず先にこの人を常
の御殿へお呼びになり、またある時はお引き留めになって更衣が夜の御殿か

ら朝の退出ができずそのまま昼も侍しているようなことになったりして、やや軽いふうにも見られたのが、皇子のお生まれになって以後目に立って重々しくお扱いになったから、東宮にもどうかすればこの皇子をお立てになるかもしれないと、第一の皇子の御生母の女御は疑いを持っていた。この人は帝の最もお若い時に入内した最初の女御であった。この女御がする批難と恨み言だけは無關心にしておいでになれなかった。この女御へ済まないという気も十分に持つておいでになった。

帝の深い愛を信じながらも、悪く言う者と、何かの欠点を捜し出そうとする者ばかりの宮中に、病身な、そして無力な家を背景としている心細い更衣は、愛されれば愛されるほど苦しみがふえるふうであった。住んでいる御殿は御所の中の東北の隅のような桐壺であった。幾つかの女御や更衣たちの御殿の廊を通い路にして帝がしばしばそこへおいでになり、宿直をする更衣が上がり下がりして行く桐壺であったから、始終ながめていねばならぬ御殿の住人たちの恨みが量んでいくのも道理と言わねばならない。召されることがあまり続くころは、打ち橋とか通い廊下のある戸口とかに意地の悪い仕掛けがされて、送り迎えをする女房たちの着物の裾が一度でいたんでしまうようなことがあったりする。またある時はどうしてもそこを通らねばならぬ廊下の戸に錠がさされてあったり、そこが通れねばこちらを行くはずの御殿の人どうしが言い合わせて、桐壺の更衣の通り路をなくして辱しめるようなことなどもしばしばあった。数え切れぬほどの苦しみを受けて、更衣が心をめいらせているのを御覧になると帝はいつそう憐れを多くお加えになって、清涼殿に続いた後涼殿に住んでいた更衣をほかへお移しになって桐壺の更衣へ休息室としてお与えになった。移された人の恨みはどの後宮よりもまた深くなった。

(1) **古典文法** 〰〰〰は、誰から誰に対する敬意を表しているか。後の【語群】からそれぞれ記号を選び、【例】にならって答えなさい。

【例】 光源氏から一の皇子への敬意 : **A ↓ B**

【語群】

- A 光源氏 B 一の皇子 C 天皇 D 桐壺の更衣
E 一の皇子の女御 F 作者

(2) **現代語訳** ①を、「この」の内容を明らかにして現代語訳しなさい。

(3) **現代語訳** ②を、誰が誰を「まつはす」のかを明らかにして現代語訳しなさい。

(4) **内容把握** ③について、一の皇子の女御はどのようなことを疑ったのか。説明しなさい。

(5) **現代語訳** ④を、「この御方」が誰なのかを明らかにして現代語訳しなさい。

(6) **内容把握** ⑤について、「苦しきこと」の内容として正しくないものを次から一つ選びなさい。

A 打ち橋や渡殿のあちこちに意地悪ないたずらをされたこと。

B 送り迎えをする女房に着物の裾をぼろぼろにされたこと。

C 通らなければならぬ廊下の戸に錠をかけられたこと。

D エ 示し合わせた御殿の人たちに通り道をふさがれたこと。

(7) **内容把握** ⑥は、どのようなことに対する恨みか。説明しなさい。

(8) **古文常識** 次の文章の **A** から **H** に当てはまる言葉を、【古文】から抜き出して答えなさい。

天皇に仕える女官たちの部屋が **A** である。これとは別に、天皇の近くに与えられた部屋を **B** という。一方、男女や身分に関係なく、さまざまな人たちが利用する部屋は **C** である。

A の中でも、天皇の住む清涼殿から最も離れた場所にある淑景舎は、庭の桐にちなんで「**D**」と呼ばれる。ここに住んでいたのが、光源氏の母「**D**」の更衣」である。彼女は、他の女官たちからさまざま嫌がらせを受けていた。そのため、清涼殿に最も近い **E** に部屋を与えられた。

内裏の建物の間にかけて渡した厚板は **F** で、屋根付きの廊下が **G** である。また、廊下の切れたところなどにかけてられた、取り外しのできる橋を **H** という。

(9) **文学史** 次の文章を読んで、あとの問に答えなさい。

与謝野晶子は、近代を代表する女性歌人である。恋愛と官能をうたった第一歌集『**A**』は歌壇に衝撃を与え、**B** 主義歌風を展開した。

夫の **C** は詩歌結社「新詩社」を主宰し、機関誌『**D**』を発刊した。**D**』には、与謝野晶子の他、多数の詩人が寄稿した。

(a) **A** から **D** に当てはまる言葉を答えなさい。

(b) 次の中から、与謝野晶子の歌集でないもの一つを選びなさい。

- ア 舞姫 イ 恋衣 ウ 赤光 エ 小扇

(c) 「多数の詩人」について、詩人と詩集の組み合わせが正しいものを、次から一つ選びなさい。

- ア 高村光太郎『邪宗門』 イ 石川啄木『二握の砂』
ウ 北原白秋『海潮音』 エ 上田敏『智恵子抄』

(9)			(8)		(7)	(6)	(5)	(4)	(3)	(2)	(1)	
(c)	(b)	(a)	F	A							カ	ア
		C	G	B							↓	↓
		A	H	C							キ	イ
		D		D							↓	↓
		B		E							ク	ウ
											↓	↓
												エ
												↓
												オ
												↓

- (1) ア F ↓ C イ F ↓ B ウ F ↓ D エ F ↓ C
 オ F ↓ A カ F ↓ E キ F ↓ D ク F ↓ C
- (2) 光源氏のお美しさには匹敵なさるはずもなかったので

・並びたまふべくも ↓ 匹敵なさるはずも

尊敬の補助動詞「たまふ」は「くなさる」「おくになる」と訳す。「べく」は、当然「くはずだ」が可能「くすることができない」で訳すと良い。

重要古語

にほひ ↓ **名** 美しさ。

- (3) 天皇が桐壺の更衣をむやみやたらに付き添わせなさるあまりに

・まつはさせたまふ ↓ 付き添わせなさる

品詞分解をすると「まつはさ／せ／たまふ」となる。

「まつはす」は他動詞なので、この語自体に「くさせる」という使役の意味が含まれる。したがって、「せ」は尊敬の意味になり、「せたまふ」で二重尊敬であると分かる。二重尊敬は、天皇や皇后などの最高階級の人物が主語の場合に用いられる。このことから、「まつはせたまふ」の主語は天皇に特定できる。

重要古語

・わりなく || わりなし ↓ **形** むやみやたらだ。無理やりだ。

・まつはさ || まつはす ↓ **動** 付き添わせる。

- (4) 一の皇子ではなく光源氏が皇太子になるのではないかということ。

直前の「坊にも、ようせずは、この御子の居たまふべきなめり」を訳してまとめればよい。

「坊」とは、皇太子に関する一切の事務をつかさどる「東宮坊」の略で、そこから皇太子を指す言葉として使われるようになった。「ようせずは」は「悪くすると」と訳す。「なめり」は、断定の助動詞「なり」の連体形撥音便「なん」の「ん」無表記に、推定の助動詞「めり」が接続したものの「くであるようだ」と訳す。

「この御子」が光源氏を指すことを踏まえて文全体を直訳すると、「皇太

子にも、悪くすると、光源氏がお立ちになるはずのようだ」となる。

- (5) 一の皇子の女御のご忠告だけは、やはり気を遣いつらく思い申し上げなされた。

・思ひきこえさせたまひける ↓ 思い申し上げなされた

品詞分解をすると「思ひ／きこえ／させ／たまひ／ける」となる。

「きこえ」は、謙譲の補助動詞「きこゆ」の連用形。「く申し上げる」と訳す。作者から一の皇子の女御に対する敬意を表す。

一方、助動詞「させ」と補助動詞「たまひ」はともに尊敬の意味。「くなさる」「おくになる」と訳す。二重尊敬なので、主語を天皇に特定できる。作者から天皇に対する敬意を表す。

文末の「ける」は過去の助動詞「けり」の連体形。「ぞ」があるので係り結びになっている。

重要古語

・なほ ↓ **副** やはり。相変わらず。

・わづらはしう || わずらわし ↓ **形** 気を遣う。はばかられる。

・心苦しう || 心苦し ↓ **形** つらい。やりきれない。

- (6) イ

- (7) 天皇が、後涼殿に住んでいた更衣の部屋を他に移して、上局として桐壺の更衣に与えたこと。

直前の「後涼殿にもとよりさぶらひたまふ更衣の曹司を他に移させたまひて、上局に賜はす」を訳してまとめればよい。

- (8) A 局 B 上局 C 曹司 D 桐壺 E 後涼殿
 F 馬道 G 渡殿 H 打橋
- (9) (a) A みだれ髪 B 浪漫 C 与謝野鉄幹 D 明星
 (b) ウ

『赤光』は、斎藤茂吉の第一歌集。

- (c) イ

『邪宗門』は北原白秋の詩集。『海潮音』は上田敏の訳詩集。『智恵子抄』は高村光太郎の詩集。